



Title	GLOCOLブックレット06 はじめに
Author(s)	宮原, 暁
Citation	GLOCOLブックレット. 2011, 6, p. 3-6
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/48317">https://hdl.handle.net/11094/48317</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# はじめに

**宮原 暁** 大阪大学グローバルコラボレーションセンター

世界中は同じ言葉を使って、同じように話していた。

東の方から移動してきた人々は、シニアルの地に平野を見つけ、そこに住み着いた。

彼らは、「煉瓦を造り、それをよく焼こう」と話し合った。石の代わりに煉瓦を、漆喰の代わりにアスファルトを用いた。

彼らは、「さあ、天まで届く塔のある町を建て、有名になろう。そして、全地に散らされることのないようにしよう」と言った。

主は降って来て、人の子らが建てた、塔のあるこの町を見て、言われた。「彼らは一つの民で、皆一つの言葉を話しているから、このようなことをし始めたのである。これでは、彼ら

が何を企てても、妨げることはできない。我々は降って行って、直ちに彼らの言葉を混乱させ、互いの言葉が聞き分けられぬようにしてしまおう。」主は彼らをそこから全地に散ら

されたので、彼らはこの町の建設をやめた。こういうわけで、この町の名はバベルと呼ばれた。主がそこで全地の言葉を

混乱(バラル)させ、また、主がそこから彼らを全地に散らされたからである。

(旧約聖書創世記11章)

歴史上、人類は様々なディスコミュニケーションを経験し、それを解消するために幾多の共通言語をつくろうとしてきた。しかし、これもまた歴史が証明しているように、ある時期、ある地域でどこもない共通語——リング・フランカ——が自発的に発生する一方で、共通語をつくろうとする企ては、ことごとく失敗に終わっている。私たちは他者とコミュニケーションをとろうとするとき何らかの共通語を必要としている。しかし、それがあつた体系をもつた共通語として私たちの前に迫ってくるとき、ディスコミュニケーションはより過酷なものとなる。共通語は、自他の差異をなくす

かわりに、両者の間の権力構造を生み出すからである。

したがってまず断っておかねばならないのは、本書のめざす「もう一つの日本語」が、特定の文法と語彙群を備えた共通言語を模索するものではないということである。むしろ、本書で言わんとする「もう一つの日本語」としての「やさしい日本語」とは、異なった言語的、文化的背景を持つ人どうしが通じ合おうとする個々の経路と、それが集まってできる集積回路としての社会のデザインと、私たちがそこにどう参加していくかという心構えに関係している。

逆説を含み、やや込み入った問題を日本社会の「多言語化」に即して言うならば、様々な言語的、文化的背景を持つ人たち——もちろん日本語の話者も含まれている——がともに日本の社会に参加していくには、いくつかの方法が考えられる。通訳などのエキスパートによって意思の疎通を図るのもその方法の一つであろう。また非日本語話者が日本語に堪能になる、あるいは日本語話者が外国語に堪能になるといった方法も実際に採用されている。しかし、これらの方法は、言語的バリアフリーの確保という意味合いが強く、非日本語話者と日本語話者とのコミュニケーションの回路を局所的なものに限定してしまうきらいがある。私たちの多くは、通訳を介して局所的に行われる非日本語話者と日本語話者の会話で何が交わされているのか、その場に立ち会わない限り、ほとんど知るよしもない。同様に、日本語が堪能ではない非日本語話者と、外国語に堪能ではない日本語話者との間では、コミュニケーションの回路がきわめて限定的なのが現状である。

日本語を母語とする人たちと日本語以外の言語を母語とする人たちとのコミュニケーションの回路を社会全体に拡大すること、あるいはコミュニケーションの現実的な「底上げ」を図るにはどうすればよいだろうか。込み入ったコミュニケーションの場面では、エキスパートに任せるべきところがあるのは当然であろうが、すべてを通訳任せにせずに、何とか通じ合おうとするには、どうすればよいか。その際、一方的に日本語(外国語)を押し付けるのではなく、双方がどのような日本語(外国語)を使えば理解し合うことができるだろうか。

これらの問いは、ピジン語の生成という半ば意識的ではないプロセスや、「やさしい外国語」といった本書とは逆のプロセスも

考えられるが、本書では、さしあたり日本語を使ってどのように非日本語話者と対話するかについて考えてみよう。海外赴任や留学、ちょっとした旅行といった場合でさえも、私たちは、その土地の言語でそこに住む人たちと会話をしたいと思う。それは故あって日本に居住する外国人にとっても、ある程度同じであろう。「日本語で話したい」、「日本語を話すことでさらに日本に住む人たちをよく理解したい」といった願望を多くの日本語を母語としない人が持っており、日本語を母語とする人が本書で言う「やさしい日本語」——いまやそれは、「相手の知っている文法と語彙を手掛かりに会話をはじめ、相手の文法と語彙の拡張を手助けすることを内容に持つ日本語」と定義できようか——で会話することで、彼(女)の世界は広がっていくのである。

この意味でもう一つの日本語としての「やさしい日本語」は、日本語を母語としない人だけに向けられたものではなく、日本語を母語とする人もそうでない人も、日本社会に生きようとするすべての人に開かれている。また、「やさしい日本語」は、それを話そうとする人を、ある言語運用能力のレベルに閉じ込めようとするのではなく、少しずつその言語世界が広がることを想定している。本書が「もう一つの日本語」をデザインする手始めとして、日本の小中学校で学ぶ外国人児童・生徒とのコミュニケーションに焦点をあてて、「やさしい日本語」を提案するのもこの点に理由がある。

こうして本書のⅠでは、日本に居住する日本語を母語としない外国人、特に小中学校で学ぶ外国人児童生徒を取りまく現状を明らかにし、なぜ彼(女)たちに「もう一つの日本語」が必要なのか、その場合の「もう一つの日本語」とはどのようなものであるべきか考えてみる。続くⅡでは、実際に学校現場にもう一つの日本語としての「やさしい日本語」を導入するためにはどのような手順が必要なのかについて演習形式で解説していく。学校現場においても、また他の場面においても、「もう一つの日本語」は、個々の学習者(話者)に合わせて、きめ細かくデザインしていくところにその神髄がある。

またⅢでは、日本語を母語としない人たちにとって、外国語としての日本語がどのように聞こえるのか、皆さんと共有するため、海外での日本語教育の現場から、中国とフィリピンの事例報告を掲載する。これらの事例では、「やさしい日本語」が教えられている訳ではないが、「もう一つの日本語」をデザインするうえでいく

つかの示唆を与えてくれる。

本書が提唱するもう一つの日本語としての「やさしい日本語」は、その先に、私たち個々人が現実の社会のなかでそれをどう実践していくのかという問いかけを含んでいる。「やさしい日本語」は、非日本語話者にとって「やさしい」ものであればあるほど、日本語話者にとってはむしろ難しい。しかし、それは少しの心構えを持つことで、誰にでもできることである。本書の全体を通して、この点に関するささやかな提言を行ってみたい。

本書は、大阪大学グローバルコラボレーションセンター（GLOCOL）が2009年から全学の大学院生に提供している高度副プログラム「グローバル共生」の必修科目の一つ、「多言語社会演習」での議論をもとにしている。こうした科目は、決して一人で計画し、運営できるものではなく、「多言語社会演習」のデザインにあたっては、この分野の専門家である京都大学非常勤講師の栗原由加先生と人間科学研究科院生の矢元貴美氏、グローバルコラボレーションセンター（GLOCOL）の教員（思沁夫、三田貴、常田夕美子、福田州平、宮原暁）がチームを組んで一人一人がその専門性を存分に活かすかたちで行われた。

もちろん、授業の主役は学生たちである。IIでは、「多言語社会演習」でのディスカッションの熱気をそのまま伝えるかたちとなっている。今後、さらに多くの受講者がこの授業でのディスカッションに参加し、「もう一つの日本語」の社会的実践にさらなる深まりと広がりをもたらしてくれることを望んでやまない。